



愛郷無限

2015年10月7日号 NO.529

写真提供:大田市

土屋館
どやだて
通信

発行者:大曲・花火通り商店街
文責:辻

お問い合わせ:080-1265-7035
tuck-t@akita-tsujiya.jp

Subject: 三年一昔 忘れること、忘れてはならないこと

週刊新潮に長きにわたり連載されている藤原正彦さんのコラム【管見妄語(かんけんもうご)】。管見とは管を通して見ているような狭い見識、視野の狭い考え、妄語とは不誠実な言葉という意味で、藤原さんが自身を謙遜して付けられたコラム名だそうです。

最新号、週刊新潮10月8日号に「十年前の懸念」と題するコラムがありました。郵政民営化から十年の時を経て日本郵政が今秋に株式上場します。幹事証券会社には異例と言われるほど沢山の外国証券会社が入り、かんぽ生命はこれまで共に商品開発をしてきた日本生命から米国のアフラックに乗り換え、アフラックのがん保険商品を取り扱う。資産運用部門のトップにはゴールドマンサックス証券の前副社長が就任。

ちょうど十年前、2005年の郵政解散選挙の際に、民主党が「郵政民営化をすれば日本の富はみなアメリカに吸い取られてしまう、日本より米国の国益を優先した民営化なので絶対に反対」と論陣を張っていた根拠(恐れる状況)の一つ一つが、正にその通りに進んでいるということですね。

しかし一方で、2005年に小泉首相と郵政民営化を選んだのは他ならぬ国民自身です。その十年後の株式上場が目先となった現在、本件に関しての十年間を顧みて総括する記事やニュースがとても少ないことを残念に思います。振り返りをしない日本人なのでね。もう既に終わったこと、決まったことだから問題ないと。

ちょっと遡りますが、週刊新潮今年5月28日の管見妄語に「忘れ去られたお針子」という題で百数十年前の事件が取り上げられていました。明治24年、ロシアが肅々と東進し極東へ軍事勢力を伸ばす中、滋賀県大津でロシア皇太子が切りつけられた大津事件。戦争の火種になる可能性のあった大事件にあつて、市居のわずか25歳のお針子が自らの命を投げ出し和議を懇願するという悲劇がありました。私はかなり昔にこの話を聞いたことがあったのですが、このコラムを読むまですっかり忘れていました。

人は忘れる生き物です。忘れるからこそ辛く悲しいことも乗り越えられる。昔は「十年一昔」と言いました。しかし早い時代の流れの中で、入っている情報や状況があまりにも多く・ドラスティックで、その忘れるスピードがもの凄く速くなっているのではないのでしょうか? 今の日本では「三年一昔」といえましょう。

藤原さんの300回を越える人気コラムは手軽な文庫本にもまとめられています。

【管見妄語 始末に困る人】 新潮文庫 2013年10月発行

ISBN-13: 978-4101248127 464円

【卑怯を映す鏡 — 管見妄語】 新潮文庫 2015年5月発行

ISBN-13: 978-4101248141 497円 共に藤原 正彦(著)



藤原正彦の

Masahiko Fujiwara

311

管見妄語

かんけんもうご

十年前の懸念

郵政解散はちょうど十年前の二〇〇五年だった。郵政民営化法案は造反議員が多く出たため衆院では五票差で可決されたものの参院では否決された。そこで小泉首相は何と衆院を解散したのだ。「公務員である郵便職員二十六万人が民間人になれば財政削減になる」などと言ったが、郵政公社は独立採算であり、人件費に税金は一円も使われていなかった。「官から民へ」とマスコミを挙げての宣伝に、国民はいつも通りに騙されて、小泉自民党は歴史的大勝利を収めた。造反議員達は抵抗勢力とか既得権にしがみつくと守旧派と指弾されたうえ、自民党公認を取り消され刺客を立てられるなどした。落選したり国民新党を結成したりしたが、彼等の多くは私の見る所、自民党の中でも最も真面目に国を憂える人々だった。彼等が議席をも賭けて反対したのは、よく勉強し郵政改革の真実を知ってしまったからだ。一九九〇年代にアメリカはそれまでの対日方針を変え、日本をアメリカの財布にしようと考えた。「(アメリカは)一九九四年から年次改革要望書で毎年、郵政事業を民営化せよと要求していた」「小泉構造改革の内容は……いずれもデフレ政策であり、日本に蓄積されている個人の金融資産を日本のために使わせないようにする戦略であった」

(菊池英博「そして日本の富は略奪される」ダイヤモンド社)。財政赤字国アメリカは、郵貯と簡保にある三五〇兆円に目をつけ、新規米国債の引受け先にしようといふ狙いをつけたのである。この戦略についてはすでに一九九三年に、米シンクタンク、戦略国際問題研究所の日本部長だったケント・カルダー氏が、「(日本の)郵貯の活用が世界経済の活性化につながる」と米経済誌に書いていた(佐々木実「市場と権力」講談社)。郵政法案とはこのような流れの中で竹中平蔵郵政民営化担当大臣の指揮の下、法案提出前の一年間だけでアメリカと十七回もの入念な協議を重ね練られたものだった。純粹に国内問題のはずなのだが、造反派が恐れたのは、民営化し株式を上場した段階で、郵貯と保険の二社が外資に買収されることだった。日本国債の最大かつ最安定の引き受け手である二社が外資に握られたら、外資の意向で国民の財産三五〇兆円が運用され日本経済の基盤は一気に崩される、と考えたのである。

民営化後十年をかけて日本郵政は今秋十一月四日に株式上場される。上場に当たっての中軸的な幹事証券は、野村、三菱UFJモルガン・スタンレー、JPMorgan、ゴールドマン・サックスと決まった。外国証券がこれほど入るのは異例だ。JAL上場では五社とも日本だった。かんぽ生命は日本生命と五年以上にわたる共同開発してきたが、急遽アメリカのアフラックのものを売り出すことになった。また日本郵政は、日本のIT企業でなく米アップル、米IBMと組んで、高齢者用アプリを搭載したiPadを高齢者に配ることになった。四、五百万台に上るといふ。これほど多くの人々の情報が外国に握られてしまうことになる。日本郵政はすでに資産運用にあり日本国債の比率を下げると言明し、運用部門のトップにゴールドマン・サックス証券の前副社長を採用した。日本はすでにアメリカの財布になりつつある。それに外資がいつか株式の二〇%ほどを買うことは充分ありうる。その外資が「格付けも利率も日本国債よりはるかに高い米国債を買え」と要求すれば、当然従わざるを得ない。事実上売ることのできない米国債だ。何もかも十年前に懸念されていたことだ。日本を犠牲にしてでもアメリカに貢献したいという不思議な人々が、小泉時代から現在に至るまで我が国の経済政策決定の中核に居るのだ。郵政上場に関し本質論は何も聞かされていない。TPPについてもそうだが、我が国の富をアメリカへ貢ぐことについてマスコミは、賛成はしても反対はしない。



藤原正彦の

Masahiko Fujiwara

298

管見妄語

かんけんもうご

忘れ去られたお針子

先日、京都葵祭にかこつけて末慶寺に向かった。明治二十四年、来遊中のロシア皇太子ニコライが、滋賀県大津で警備の巡査に斬りつけられ重傷を負った。大津事件だ。ロシアはその少し前にシベリア鉄道の建設を世界に宣言していた。この鉄道が完成し、ロシアが兵員や物資を自由に極東に運んだら、満州と朝鮮どころか対馬と北海道までやられてしまう。不凍港が欲しいロシアは旅順あたりに大軍港を作り、極東の制海権、ついで経済の主導権を握るだろう。工期短縮のため東端のウラジオストクからも工事を始めることにし、ニコライはその起工式に出席する途中だった。この事件を口実に強大国ロシアに宣戦布告されたら国家の存亡が危ぶまれる。厳しい領土割譲や賠

五〇歳を越える頃から古いものが近く感ぜられるようになった。年齢を四捨五入すれば一世紀になり平安時代などはその十倍にすぎないからだ。そのせいか近年しきりに京都に行きたくなる。そんな私を女房は、「田舎者に限って上落したがる」と揶揄する。確かに一途に上落を旨とした木曾義仲は信州木曾の育ち、新田義貞は上州生まれ、武田信玄は甲州、豊臣秀吉は尾張、とみな田舎者だ。なるほど両親とも信州山奥の私は誰より純粹無垢の田舎者だ。それがどうした。

償請求もありうる。国民は快癒を祈り、心痛の明治天皇は翌早朝に新橋を出て京都へ向かい、ニコライを見舞い謝罪した。この直後、日本橋の魚問屋にお針子として住み込んでいた二十五歳の畠山勇子は、奉公先を辞め、衣類を質に入れた旅費で天皇とニコライの滞在する京都に向かった。そして五月二〇日、夕暮の京都府庁前で、女の嗜みとして細帯で両脚を固く結んでから、刺刀で咽喉と胸を深く切り自決した。親類に遺書を送り、ニコライへの謝罪を含む両政府への嘆願書を府庁に提出した直後だった。天皇や勇子の行動もあつたのだろう、ロシアからは宣戦布告はおろか、いかなる要求もなかった。末慶寺を訪れたのは勇子の墓があるからだ。当時の住職和田準然師が、当初身元不明だった勇子の血まみれの遺体を同情心から引き取り葬ったのだ。実はここを訪れるのは二度目だった。ポルトガルの文人モラエスの伝記「孤愁」(文春文庫)を執筆中の四年前に寄った。明治四〇年に来訪したモラエスがこんな文章を残しているからだ。「祖国と天皇陛下のため自分のもっている唯一のもの、いのち、を投げ出した勇子。祖国の名誉と平和を保ち、天皇陛下の御心を安らかにしてさしあげよう、と考えた勇子。……紅毛人はこれを狂信的行為とかヒステリー

発作と混同するだろうが決してそうではない」。モラエスは、勇子の遺体を葬った和尚、高さ四メートル近くもある緑がかつた御影石の立派な墓を作った地元の人達、一介の針子のためにわざわざ寺を訪れ歌や句を寄せた人々、そんな人々のいる日本という国の心やさしさに感激した。明治二十八年にここを訪れたハーンと同様、モラエスは和田準然師から遺品の数々を見せてもらった。櫛、珊瑚のかんざし、自害に用いた錆びついた刺刀、数珠、汽車の中で買った血染めの新聞などだった。モラエスは二十五歳の針子の心情にハンカチで目を拭った。

以前訪れた時は墓参だけだったから今度は遺品、それにハーンやモラエスからの手紙も見せてもらおうとした。ところが、墓前で手を合わせ墓石をなでたり、門に戻ってベルを押ししたり半時間も繰り返していたが人気がない。帰ろうと歩き出すと向うから自転車で来た若い女性が寺の勝手口に止まった。和田準然師の曾孫の娘のようだった。今は遺品を公開していないとのこと諦めるしかなかった。見たい者もさしてないのだろう。「一人の人間の命は地球より重い」という時代の中では、狂信的愛国者と片づけられているのだ。日本人はモラエスが心から嫌った紅毛人になり果てたようだ。